

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 李 明喜

論 文 題 目

川端康成文学研究

—『雪国』の歴史的成立とその生成方法—

論文審査担当者

主査 名古屋大学教授 塩村 耕

委員 名古屋大学教授 坪井 秀人

委員 名古屋大学准教授 大井田 晴彦

【本論文の概要】

本論文は、『雪国』を中心に、川端康成の文学をさまざまな同時代的視点から捉えなおすことによって、その成立の原理や方法を解明しようと試みたものである。

本論文の前半では、『雪国』が成立した昭和10年より戦後にかけての約14年間の「『雪国』の時代」とし、その間、川端文学が何を目指そうとしたのかを論ずる。『雪国』は昭和10年よりさまざまな雑誌に掲載された7篇の短編を統合し、若干の削除と増補を加えて、12年に単行本として刊行された（戦前版）。更に追加の4篇が15年より22年まで断続的に雑誌に掲載され、それらをまとめ、改稿を加えて23年に再版刊行され（戦後版）、流布する。第1章では、初出、戦前版、戦後版の三者を比較し、2度の統合と改稿にどのような意味や方向性があったのかを検討する。初出にあった象徴や虚無、皮肉といった感覚が最初の統合の際にやわらげられ、一方、追加の4篇では方向が転換して「死の世界」が強調され、それが2度目の統合では「死」が削除され、「非現実的な世界」が強調されるようになるとし、一連の『雪国』が川端文学の感覚の変化を表現しているとする。第2章では、川端文学における土地のもつ意味について、伊豆、浅草、満州を取り上げて考察し、その土地にある対照的・両面的様相への注目が認められ、その特徴は『雪国』にも見られるとする。第3章は、川端自身が提唱した用語でもある「温泉文学」という視点に着目し、雑誌『温泉』など同時代の温泉に関する言説を検討し、川端文学における、温泉という場のもつ意味を考察し、そのことは『雪国』の本質に関連するとする。第4章は『雪国』の時代に書かれた川端の長編連載小説『女性開眼』と、同じく長編連載の「本因坊名人引退碁観戦記」を取り上げ、初出と単行本諸版に見られる改稿を比較し、川端の求めた美や日本の伝統について考察する。

本論文の後半では、同時代の文脈がどのように川端文学と響き合っているのかを具体的に論ずる。第5章では、昭和10年代の「文芸時評」を博搜して検討し、それが『雪国』の変化にいかに関与したのかを検証する。いっぽう、文芸時評家として活躍した川端自身の批評活動についても取り上げ、「批評する／批評される」という、せめぎ合いの中で生まれてきた、この時代の文芸のあり方を考察する。第6章では、昭和12年に、戦前版『雪国』が第3回文芸懇話会賞という文学賞を受賞したことの意味を論ずる。同賞の主催者は、昭和9年に文化統制を目的として、内務省警保局長が設立した文学団体「文芸懇話会」であった。会の沿革や、関連する川端自身や関係者の言説を整理し、当時の「文学と社会」のあり方を示すコンテクストとして位置付け、晩年のノーベル文学賞受賞と同様、文学賞受賞が、その文学の本質的な言説を集約される機会となったとする。第7章は、川端が戦後版『雪国』を刊行する前に携わっていた、貸本屋・出版会社である鎌倉文庫に着目し、鎌倉文庫が発行した雑誌『人間』に見られる言説を通して、前後版『雪国』の成立との関連を考察する。

論文審査の結果の要旨

【本論文の評価】

本論文の基本的な方法、態度は、初出原稿や単行本の初版や再版など、本文の各段階の変化を丹念に比較し、その相違の意味について考察すること。また、雑誌など同時代のさまざまなメディアを博搜して、文学の背景にある社会や文壇の状況というコンテクストを把握しようとする。そして、それらを総合して、通常の読書からは解明しがたいような、より深い本文の理解を目指すこと、にある。

『雪国』は現在、ほぼ戦後版のみが流通しているが、初出短編、戦前版、追加短編、戦後版と、複雑かつ長期にわたる成立過程を反映して、さまざまな本文が存在する。論者は、その諸本文の改変を、完成度の高い定本に至るといような直線的ないし予定調和的な過程と見なさず、その時々作者の感覚の変化を表現したものとして総体的にとらえようとしている点が、まず斬新で評価される。温泉という場の特殊性と、そこで生活する人々への興味を重視する「温泉文学」の視点による分析も独自のもので、『雪国』の成立過程に温泉文学の要素が付け加えられているという論や、「湯」によってさまざまな問題の解決される場面がことさらに描かれているという指摘は重要である。『雪国』と同時代に書かれた『女性開眼』と「本因坊名人引退碁観戦記」という二つの性格の異なる長編連載に着目し、これも『雪国』と同様に各段階の本文の相違を分析し、川端文学における美や日本の伝統の問題を浮かび上がらせることに成功している。

また、川端自身も深くかかわった文芸時評に焦点を当て、同時代の批判が『雪国』の変化に影響を与えたという論は説得力がある。戦前戦後に受賞した文学賞に着目して、その意味を検討しつつ、作家と時代とのかかわり方について教条主義的な批判に陥っていないことも評価される。

ただし、本論文にも問題点が少なくない。『雪国』の相違について、感覚の変化を指摘する点はよいが、いまだ現象の指摘にとどまっていること。文芸時評に着目しながら、同時代に多く見られた「社会的歴史的現実」の欠如という川端文学批判の問題が、十分に掘り下げられていないこと。「温泉文学」という視点や「土地」との関係の重要性を指摘しながら、同様の分野についての文学史的考察を欠くこと、などである。何れも今後の課題とすべきであろう。

論者は韓国語を母語とする留学生であるが、論文の日本語に表現上の不備は少なく、同時代の書籍や新聞雑誌類を多読して、現在からは理解されにくいような、当時の社会背景や論壇の状況を把握することに努めており、近代文学を研究するための基本的作業を積み上げた労作である。

以上により、審査委員は全員一致して、本論文が博士（文学）の学位を与えるのにふさわしいものと判定した。